

都市エスニック・コミュニティ研究の視点と方法
 —— 米国での事例研究を手がかりにして ——

広 田 康 生

I. はじめに —— 問題の所在 ——

わが国においても「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」研究の必要性が高まってきている。とりわけ家族で来日する外国人就労者の増加はたとえそれが僅かの期間にせよ、自らのそれとは異質な世界で遭遇する様々な問題や彼らの“移民経験 (ethnic experience)”が抱える諸問題を、単に、就労者自身に関わるものとしてだけでなく、その家族や児童の問題としても呈示してきた。いわば「移民」行為をきっかけに、異質な世界で生活を余

目 次

I. はじめに — 問題の所在 —	1
II. 前提としての「エスニシティ再生論」と「新移民 (NewImmigrant)」	3
III. 「適応-統合過程」に生じる諸問題と分析の焦点について	6
1. 適応の位相 — 「非ゼロサムモデル」と「異質性認識」 —	6
2. 家族 — “物語の形成” と「現実」の調整 —	10
3. 児童 — 「社会化」過程と「エージェント」の社会的性格について —	14
4. アイデンティティと組織	
— 状況的アイデンティティと「社会的世界」概念	17
IV. 結びにかえて	
— 都市社会学と「エスニック・コミュニティ (移民コミュニティ)」	22
<編集後記>	30

儀無くされる諸個人や家族の、日常的な「適応」過程やその「世界」が丸ごと問題になるとの意味で「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」としての研究題域が要請されてくる。

だがわが国の場合、そうした“移民行為”をきっかけに異質な世界に「適応」し、それぞれが生活者個人としての「自己確認」を図る過程で生じる様々な「問題」や、その独特の経験を支える「世界」としての「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」の性格や意味を考察するための「視点」や「方法」は、けっして整備されているとは言えない。何を、どのような側面に焦点をあわせて、どのように調べていけばよいのか、そのための議論が充分になされているとはいいがたい。そこで本稿では、1991年6月から11月までに横浜市で実施された筆者らの「日系人面接調査」⁽¹⁾から提起された諸論点に対応させつつ、米国の特に「新移民」を対象とする「移民コミュニティ」研究の諸事例をレビューしていきたい。「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」研究は、米国都市社会学（urban sociology）の歴史そのものであったし⁽²⁾、さらに米国における「新移民（new immigrants）」の適応に関する最近の研究諸事例を見ていくと、そこには現在のわれわれにとっても極めて示唆的な点が多いからである。

筆者らの「面接調査」から提起される論点とは、(1) 相互の「異質性認識」と「状況の定義」の問題——それは、たとえば「単身者」へのヒヤリングや家族特に児童達へのヒヤリング調査において呈示してきたように、彼らは異質な世界にはいつてきてまず自分がそこでどう見られ、われわれが彼らをどう見るか、ということに気にする。そして互いの「視線」のなかで彼ら自身の「状況の定義」を再確認し「エスニシティ」の意味や「エスニック意識」などが問い直される。この過程においては「家族」の果たす役割も大きい。このテーマは、筆者らの、どの面接調査の根底に潜む問題でもあった——、(2) 適応形態に関する問題——彼らは必ずしも受入れ側社会に「同化」しようとしているわけではない。だが彼らは言語や習慣に関しては見事に「適応」する。彼らのこうした「適応形態」に生じる様々な問題の理解なしには、彼らに独特の行動形態や「アイデンティティ形成」の問題は理解できない——、(3) わが国における社会統合のプロセスとエージェントの役割に関する問題——「適応」と「統合」は同じコインの裏と表である。とりわけ「児童」の適応過程に焦点を合わせる時、彼らの「社会化」とその「エージェント」である学校等の教育機関の性格が問題になる。彼らの「社会化」の過程は、受入れ側社会の「社会統合」の性格をよりきわだった形で示してくれる——、そして(4) エスニック・コミュニティの組織的性格の問題——我々の面接調査で

は、彼らの独特の行動を支え保障するものとしての「日系人世界」が、国家や地域の枠を越えて存在することが示唆された。無論それは、特定の組織の存在というよりも、彼らの経験の独自性を保障してくれる「世界」としての存立様式をさす。それは、従来の組織概念やネットワーク概念よりもさらに曖昧であるが重要な性格を示唆している——等である⁽³⁾。

II. 前提としての「エスニシティ再生論」と「新移民(New Immigrant)」

1970年代以来、米国社会では、「エスニシティの再生」に関するテーマが急浮上している。すなわち、近代化ないし現代化の進行する社会で、なぜ「エスニシティ」を軸にした社会的関係や社会的な集合が維持され、しかも積極的な意味をもつのか。そもそも現代における「エスニシティ」とは何か——こうした諸点が論議の俎上に登っている。

ところで、「エスニシティの再生」に絡む研究においては、その方法態度をめぐって一つの趨勢が認められる。すなわちエスニックな関係性ないしエスニシティを軸にする社会的な集合を、彼らの社会経済的な構造的諸要因に焦点を合わせて解釈していこうとする立場がそれである。ここでは「エスニシティ」とは、「生得的なもの」としてではなく、例えば出身国、人種、宗教、言語その他シンボリックな特徴などを示す諸指標や階級的な地位及び、同地位と文化的な境界との重層、などによって決定されるものとの解釈がおこなわれている。二三の論点を紹介しよう。たとえばF.ニールセン (Francois Nilsen) は、現代社会における政治的な諸要求に根ざした『エスニシティの再生 (resurgences of ethnicity)』はこれまでの社会学的通念に一つのパラドクスを呈示していると述べ、「近代化」ないし「現代化」が必然的にエスニックな諸特徴に基づく人々の区別や関係性を消滅させるとの一般通念——彼女はこれを「拡散-消滅モデル (diffusion-erasure model)」と呼ぶ——は、特に先進産業社会における「エスニシティの再生」を説明できず、これに代わって二つの「競合するモデル」が社会学者たちの注目を集めている、と主張する⁽⁴⁾。ニールセンのいう、「エスニシティ再生」を説明する二つの競合するモデルとは、「対抗的エスニシティモデル (reactive ethnicity model)」と「競争的エスニシティモデル (competition model)」である。前者では「エスニシティの再生」は地域の不均等発展と結びついた「文化的な分業」に焦点をあわせることで解釈されるとするもので、後者は近代化に伴う普遍主義的諸基準によって分化する諸個人が、資源獲得の競争のなかで勝利するために、改めてエスニシティに基づく繋がりを必要としていると解釈するものである⁽⁵⁾。ニールセンと同様の主張はS.オルザック (Susan Olzak) にも見られる⁽⁶⁾。オルザックは、エスニシティにもとづく人々の政治的社会的集合・動員がど

のような条件のもとで発生するのかを明らかにすることが、現在のエスニシティ論の主テーマであるとして、そうした「エスニシティを軸にした社会的集合を解釈する枠組み」として、(1) 発展理論 (Developmental Theories), (2) 内的植民地及び文化的分業モデル, (3) 経済学的モデル：引き裂かれた労働市場モデル (Economic Model of Ethnicity: Split and Segregated Labor Markets), (4) 競争的モデル (Competitive Model of Ethnic Mobilization) などの諸観点が挙げられる、と論じている⁽⁷⁾。ちなみにオルザック自身は、「エスニック・モービライゼーション」を、地域の不均等発展、エスニック間の不平等な関係性、都市化、そして政治的部門での政策形成の問題等の諸要因に注目して解釈する必要性を主張している⁽⁸⁾。

ところで、以上のような「エスニシティの再概念化」が、世界的には、第二次大戦以降のいわゆる民族主義の台頭、近年のエスニシティの政治化や自立、そして国家としての独立を求める趨勢等を背景に、特にアメリカでは都市部でのいわゆる“マイノリティの暴動と政治主義化”等の現象を、構造論的に解釈するさいの枠組みとして提起されていることは明らかであるが⁽⁹⁾、その一方で、米国におけるエスニシティ再生のテーマ浮上には、もう一つの現実的背景がある。すなわち1970年代以降急増した「新移民 (New Immigrants)」の問題である。実際、「アメリカの1970年代は、1910年代以上に、移民の流入がトピックスになった時代であった」⁽¹⁰⁾といわれる。

特に1970年代以降の移民激増は、ベトナム戦争における南ベトナムの敗戦、旧ソ連における民族政策の変化、アメリカへの出移民を許すキューバの政策の変化、メキシコからの不法労働者の流入がその原因になっているが、それはアメリカのエスニシティ構造に新たな影響を与えた。たとえば、アメリカ大都市圏における「人種的・民族的」セグリゲーションの変化について研究したD.マッセイ (David Massey) とA.デントン (A. Denton) によれば⁽¹¹⁾、特に移民の出身国別差別を撤廃した1968年の移民法の改正が画期的な役割を果たしたという⁽¹²⁾。マッセイらによれば「1970年代をとおして約450万人の合法的な移民と、少なくとも200万人の不法移民が流入した。それはほとんどアジア及びラテン・アメリカからの移民であった。彼らはロスアンジェルスやニューヨーク、シカゴそしてマイアミなどの都市的地域に最初のうち集住し、同地域に急激にヒスパニックやアジア系住民の人口を増加させた」という⁽¹³⁾。彼らはまた次のようにも指摘している。「移民による民族的人種のマイノリティの急激な増加はセグリゲーションの現実には二つの面で影響を与えた。第一にそれは、ヒスパニックやエイジアンなどの移民集団に対するネイティブの否定的な態度を増大させた。その種の反応は、特に不法移民に対して向けられ、特にそれは黒人のネイティブの間に深刻化した。第二に、移民の継続的流入 (migration chains) が、特定の近隣に集住する移民集団の間に顕

著化した。ニュー・カマーズ (new commers) たちは、友人や親戚のいる地域に流入し、ある程度認知されてくると、その同じ地域に住宅を捜し、そして独自のエスニック・エンクレーブを拡大していった⁽¹⁴⁾。

ところで、アメリカにおける人種・民族的関係性の構造に新しい刺激を与えているといわれる「新移民」はこれまでの「エスニックス」たちとどのように異なっていたのか。

いわゆる「新移民」が従来の移民一般と異なっていた点は、彼らが比較的高所得、高学歴、高技術の持ち主で、しかも家族および高齢者をともなって移民しており、したがってそのホスト社会への適応の形態やかかれら自身の「エスニックコミュニティ」の形成の仕方とその特徴においてこれまでとはちがった形態をとることにある。したがって彼ら「新移民」の一般的な属性変化にともなって、いわば「エスニック・ソリダリティの性格」——エスニシティ再生テーマの核心でもある——に関しても新しい理解と視点が必要とされてくる。たとえば、S.ゴールドによれば、従来、移民コミュニティとその「ソリダリティ」に関しては、それがホスト社会への同化を阻む障壁とみなされることが多かったが、現在の「新移民」の場合には、逆に彼らのメンタル・ヘルスの維持の点でも相互扶助の点でもそしてホスト社会への同化を支援する組織としても有効であるとの観点から、そのコミュニカルな性格や類型、そして諸個人のアイデンティティのあり方の積極的評価をするという傾向が強くなってきたという⁽¹⁵⁾。たとえば、もともと「新移民」のつくる「エスニック・コミュニティ (移民コミュニティ)」に対しては、当初は、その「エコノミック・エンクレーブ (economic enclave)」としての性格に注目が集まっていた。たとえばF.コ布林 (F.Kobrin) は、移民のつくるそうした「エコノミック・エンクレーブ (economic enclave)」の強さの秘訣として、(1) 労働力の優秀性とアメリカでの労働習慣の修得能力の高さ、(2) 労働力自体の低廉性、そして(3) 当該の「エスニック・コミュニティ」が主とする産業をサポートする社会的経済的支援、などの諸条件を挙げ⁽¹⁶⁾、また、S.モデル (S.Model) はニューヨーク市における黒人、イタリア系住民そしてユダヤ系住民の経済的役割に焦点をあてつつ、彼らの経済的集合体としての強さを、生産と消費を媒介するような経済的役割を果たす職業に彼らが志向していることにある、と解釈し、いわば「ミドルマン・マイノリティ (middleman minority)」としての性格分析が必要なことを主張しているが⁽¹⁷⁾、しかし同時に彼らは、こうした新移民の「エコノミック・エンクレーブ」としての強さを、その社会的な結合の強さに求め、それが彼ら自身のエスニックな関係性とコミュニカルな関係性を軸に支えられていること、そして、労働力の低廉性と高い労働意欲が彼ら自身のエスニックな関係性において再生産されている点を指摘

している⁽¹⁸⁾。

すなわち、「新移民」の現実を背景にした「エスニシティ再生」のテーマはこうした、彼らの「エスニック・コミュニティ」のあり方やその紐帯の性格そしてアメリカ社会へのその独自の適応の仕方とそこでの彼ら諸個人のアイデンティティの形態をめぐって展開してくる。前項で述べた「エスニック・コミュニティ論的研究」が要請される理由がここにある。ちなみに彼ら「新移民」の一つである「ベトナム系移民」と「ロシアユダヤ系移民」を研究してきたS.ゴールド(S. Gold)によれば、必ずしもこれまでの「構造論的理解」はこうした新移民の行動の理解には適切ではなく、ここでは、移民諸個人の経験とコミュニティの行動に焦点を合わせた新しい理解が必要になってきており、さらにそうした研究が近年急激に増加してきた、と述べている⁽²⁰⁾。ゴールドによれば「マイノリティの権利や民族的多元主義をもとめる政治的、文化的運動が最近のエスニックコミュニティの再評価に貢献していることは確かだが、それと同様に最近移入してきた移民個人個人の経験がそうした再評価に貢献していることも確かである」⁽²¹⁾ということになる。

さて以上我々は「新移民」に関する諸研究が、移民個人の経験の独自性や彼らのコミュニティな関係性についての解釈を出発点とする、いわゆる「エスニック・コミュニティ(移民コミュニティ)論的アプローチをとることを確認してきたが、次にそうした観点からの研究方法と枠組みについて詳しく見ていきたい。とりわけその際には、前述の諸点に注目しつつ、彼らの「適応」経験が、「移民」および受入れ側社会双方の「異質性認識」との引き合いにおいてなされていることを前提にしたい。我々の問題とする「適応形態」や「アイデンティティの再組織化」のプロセスもそうした地平において生じる問題であるから⁽²¹⁾。

III. 「適応-統合過程」に生じる諸問題と分析の焦点について

1. 適応の位相——「非ゼロサムモデル」と「異質性認識」——

「日系人」面接調査においては、彼らが必ずしも「同化」を志向しているわけではないこと、だがそれにもかかわらず、日本の文化と社会にはある程度の「適応」を志向していることを、その「適応プロセス」が表す一つの特徴として呈示した。だが、とりわけ「適応形態」は、受入れ社会の条件と「移民」自身の条件との接点において形成される。ここではそうした「適応形態」に関する最近の特徴とその分析のポイントについて、特に「エスニック意識」に焦点をあわせて示唆を得てみたい。

さて前述のように、もともとアメリカの都市社会学においては、「適応過程」に生じる文化葛藤の諸問題を、都市問題として呈示することからその学問分野が発祥していた。ただしゴールドによれば、彼らのつくる「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」は、そうした都市問題を生み出す根源として、マイナス・イメージをもたれていた、ということになる。無論ここには、「移民」は受入れ社会の「中枢的文化」に同化するものであり、それが「移民」にとって最終的な目標でもある、という信念が前提としてある。だが、最近では、むしろこうした「同化」志向を前提にしない「移民」の適応類型が注目されだしている。「同化志向ではない適応形態」とはどのようなものか。

特にアメリカに「移民」した、「コリアン・コミュニティ」を調査研究しているK.C.キム(K.C.Kim)らは、以上のようないわば「適応はするが必ずしも同化は志向しない」形態の「適応」類型を、「適応の非ゼロサムモデル(non zero-sum model of assimilation)」と名付けている⁽²²⁾。キムらによれば「適応の非ゼロサムモデル(non zero-sum model of assimilation)」には、(1) 同調的多元主義(accommodative pluralism)、(2) 抑制的文化変容(controlled acculturation)、(3) 同化なき文化変容(acculturation without assimilation)、(4) 統合的多元主義(pluralistic integration)などの諸類型が含まれる。ここで、(1)の同調的多元主義モデルとは、日本人「移民」に象徴される形態であり、差別されたマイノリティが一方では可能な限り統合されることを望みつつ、それでも、セグリゲイトされた役割を負わされることには抵抗するような適応の形を指し、(2)の抑制的文化変容とは、ある種の宗教集団に象徴される形態であり、一つの文化が他の文化を受け入れる時、現行の価値システムにうまく統合する形で新しいそれを受け入れるタイプの適応を示し、そして(3)の同化なき文化変容とは、シカゴのユダヤ系住民に見られる場合で、高度の文化変容をおこしてはいるが、決してエスニック意識やエスニック・アタッチメントは失わないという形の適応の形態であり、最後の(4)の統合的多元主義とは、カナダのトロント市での五つの適応形態を象徴する適応形態で、これには、「都市村落人タイプ」「アングロ・カナディアン的同調タイプ」そして「移動者型適応タイプ(transient)」と「疎外者型(alienated)」が見られるが、要は、10年以上同地に居住し、社会経済的な地位の上昇をめざしているものの、伝統的な言語や文化や宗教を維持し、家庭では母語をはなすような「移民」適応の類型を指す、という⁽²³⁾。

ところでこうした様々な「適応類型」が生じるのは、「文化的適応」の側面と「社会的適応」の側面が必ずしも一致しないという事実があるからである⁽²⁴⁾。実際キムらによれば、「文化変容」は「社会的同化」の必要条件ではあっても必ずしも充分条件でない。特にそれは、最近の「非-白人系移民」に特徴的でさえある。キムは、コリア系「移民」の場合、特に医者等の

社会的地位の高い「移民」の場合でもその専門職としての社会的地位の高さや英語会話能力のたかき、そしてプロテスタント教会への加入などの社会的行動にも関わらず、そうした高い社会経済的地位が必ずしも「社会的同化」には結びつかないことを指摘している。アメリカにおけるコリアンは、いわば文化的には適応しているのだが社会的にはその社会構造の中核部分には同化しているとはいえない、のである。ちなみにキムらはアメリカにおけるコリアン系「移民」の、文化的に適応はするが、社会的には制限されるその適応の形態を、しかも適応しつつも自らの文化的コアの部分は決して捨てることはないような「適応」形態を、「執着的適応 (adhesive adaptation)」と呼び次のように述べている。「コリアン系『移民』の適応様式は、一般的には、付加的で執着的であるといえる。すなわち、彼らは社会的にも文化的にも一応は同化しているのだが、しかしそうした同化は特に社会的な次元においては制限されており、そしてその結果彼らの同化は、コリアンに伝統的な文化や社会的ネットワークを弱めたり捨て去ったりすることは決してない。これが正しいとするなら彼らの適応形態は、アメリカのアングロ-サクソン系への同調を示すような、同化のゼロ-サムモデルでは決してない」⁽²⁵⁾。

ところでこうした「適応形態」は「非-白人系移民」というその民族的な特性に特有のものなのであろうか。キムらは「適応」の類型について、次のように論じている。「特にコリアン系『移民』の場合、そして非-白人系『移民』の場合にそれは一般的にいえることだが、彼らはアメリカにおける居住年数の長さや社会経済的地位の高さやその文化的変容にもかかわらず、構造的にセグリゲイトされるか、あるいは、その社会から民族的に区別される傾向がある。『移民』たちがこうした構造的な制限を認識することでそれはまたかれらがその支配的社会から集団的に認められようとする自らの希望を抑制し、そして自分たちを守るために、その安全や第一次集団的な集団所属における満足感や社会的認知やアイデンティティを支えてくよう機能するエスニック意識を維持せざるを得なくなる。換言すれば『移民』たちの強いエスニック・アタッチメントの形成は、たとえばアメリカの社会構造に内在するエスニック・セグリゲーションや、『移民』達のそうした抑制された適応能力、そして特定の時期における受入れ社会の経済的、生態学的諸条件などのいわば意図せざる結果といえるかもしれない」⁽²⁶⁾。

キムの指摘の重要な点は、「適応の非ゼロ-サムモデル」が民族的な特性だけではなく受入れ側社会の諸条件との「引き合い」において決定されるとの事実を指摘している点にある。実際、受入れ側社会の諸条件には政治的・法律的諸制度や意識の問題も含まれる。

キムらのこうした「適応類型」に関する考え方は、我々にとってもきわめて重要な示唆をあたえてくれる。とりわけ「意識」の面に関しては、実際、筆者らの面接調査においても、日系人の適応に関しては、彼ら自身が持つ「エスニック意識」と同様我々自身が知らず知らずの間に彼らに抱いている「エスニック意識」が関わりとの感触を得ていた。日常の微細な社会過程において生じる、差別や偏見を含んだ「エスニック意識」ないしは、相互の「異質性認識」の問題が、「移民」に関わる制度上の諸問題——「構造的な拘束性」——同様、その「適応形態」に関して重要な役割を演ずるとの指摘がここではなされている。ちなみに、マイアミにおけるキューバ移民のコミュニティを研究している A. ポルテス(A. Poltes)によれば、「最近のエスニックコミュニティ研究の視点は、焦点を、アングロ系住民がマイノリティに対して持つエスニック意識から、マイノリティ自身をもつエスニック意識に焦点をあわせだしたという。ポルテスによれば、エスニック・アイデンティティやエスニック意識そしてエスニックソリダリティに関する研究は、近年の調査研究の焦点になってきており、同化志向よりも自立志向を前提にした彼らのエスニック・ソリダリティの特徴を「同意識」を介在させつつ研究することが重要であると指摘している⁽²⁷⁾。無論、構造的要因を重視するポルテスの論議は、そうした「エスニック意識」が、「他とは区別される人種的、文化的特徴をもつ集団の、ある特定の地域的エリアや経済的役割への封じこめによって強められる」のではなく——こうした考えかたを ethnic enclosure hypothesis と呼ぶ——、むしろ「彼らがその社会的に支配的な職業や役割に参入するときに自らの異質性を認識することによって」強められる（これを ethnic competition hypothesis という）、との議論にあるのだが⁽²⁸⁾、しかしともかくここでは、「適応」の過程が、「異質性認識」に大きく影響されること、さらに「エスニック意識」が彼ら「移民」たちの社会関係やコミュニティの性格的特徴に深く関わりとの指摘を、確認しておきたい。

ところで、互いの「異質性認識」にもとづく、偏見や差異意識を含んだ「エスニック認識や意識 (ethnic awareness or ethnic consciousness)」の社会学的分析については、H. ブルーマーの再解釈をおこなった S.M. ライマン (S.M. Lyman) が、興味深い指摘をしている⁽²⁹⁾。

ライマンは人種関係に関するブルーマーの視点の重要性を指摘した論文のなかで特に彼の「カラー・ライン (color line)」の概念は、現在の研究においてもなお重要な視点をなすという。ライマンによれば「ブルーマーは人種関係に関して次のような考え方を提起した。すなわち、人種的偏見はある種の態度を示すというよりは、集団の位置に関する意識 (a sense

of group position) を示している。すなわち人種関係は様々な制度的場面や制度化された場面における「カラーライン (color line)」の動きを注意深くみることによって研究される⁽³⁰⁾。ここでの「カラーライン」とは、「集団位置に関する意識」のひとつとして、次の四つの基本的な感情をともなった社会的なヒエラルキー意識として出現するような人種的偏見のことである。その四つの感情とは、(1) 優越感情、(2) 従属している人種、民族が固有にもつ差異と疎外の感情、(3) 特権と利益を要求する感情、そして (4) 支配的な人種及び民族のもつ特権にたいして従属する人々がかもつ恐れや疑いの感情である⁽³¹⁾。

ライマンの、エスニシティ関係に関するブルーマー理論の再呈示は、基本的には「白人-黒人関係」の次元を対象にしたものだが、しかし、こうした意味でのエスニック意識の問題は「移民」の「適応」の問題を考えるうえではきわめて重要である。なぜなら彼らの「適応」の問題は、公的な領域でのそれと同様に私的で日常的なレベルでのそれが深くかかわるからでもある。

われわれは「適応」過程に関しては、その文化的・社会的という二つのレベルでの問題を制度的条件との関連で注意深く選り分けつつ、そこに「エスニックス」として彼らが抱く「疎外感」や「差異の感情」、そして「自己主張」などの意識面と関係づけて彼らの「適応形態」を抽出していく必要に迫られている。ちなみにここでの諸理論を参考に「日系人調査」における彼らの「適応」を考察すると次のようにならうか。すなわち彼らは、言語や生活習慣等の文化的な側面における「適応」は見事になされるが、社会的には学校制度その他受入れ国日本の制度的不備によってもまだ遅々として進んでいない。さらに彼らの移住が必ずしも「祖国」への邂逅を望んでなされたものでなくむしろ「経済的理由」にあり、その意味では彼らは「祖国」への同調を望んではいないこと。さらに彼らの「祖国」と「母国」双方での「外国人」としての地位と意識が、「日系人世界」への強いコミットメントをもたらしていること、そしてその日系人世界は必ずしも国家の枠にとらわれない性格を示すこと、そしてこうしたことを前提に彼らの受入れ社会のなかでの疎外感はむしろ別の社会への移動を望ましいものとしていること、等が分析的に抽出される。その意味では彼らの「適応」の形態は、特定国家の文化的社会的要素に執着しない「移動者型」適応と呼ぶことが出来るかもしれない。

2. 「家族」—— “物語の形成” と「現実」の調整

筆者らの面接調査においては、特に児童と母親との「適応進度」の違いをきっかけに、適応過程のなかで、成員それぞれが自らの関連性構造をどのように調整し、家族としての一体感ないしソリダリティを維持するか、との状況に直面している実態が示された。だが家族は

それにもかかわらずとりわけ児童たちの「適応」に強い影響を与えている。「家族」は移住の過程でどのように変化しているのか、その果たす役割は何かといった問題が提起される。

従来の「移民」コミュニティ研究にあって家族の問題は、「移民」過程のなかで家族はどのように崩壊するか、という点に焦点が合わせられてきた。いわば、異質な社会への適応過程のなかで、家族のはたす役割の積極的な側面よりもむしろ、崩壊に象徴されるような消極的な側面に焦点が合わせられがちであった。だが、最近の「新移民」コミュニティの研究にあっては、むしろ、家族が果たす積極的な役割に焦点があわせられている。

たとえば、すでに説明済ではあるが前述のF. コプリンにおいても「新移民」のつくる「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」の経済的なエンクレーブとしての特徴説明の重要な部分に、彼らの、家族的紐帯ないし親族的紐帯に関わる諸要因——たとえばファミリー・ビジネスとしての特徴や家族的紐帯を軸にした労働習慣や倫理などの教育がおこなわれることなど——を挙げているし、また同様にK.C.キムらも、コリアン・コミュニティの活力の秘密として特に彼らのファミリー・ビジネスへの志向性が異質な世界への「適応過程」において、重要な役割を演じている現実についての調査結果を呈示している。ちなみにゴールドは、家族のこうした役割の重要性を前提にしつつ、家族研究ポイントとして以下のような諸点を挙げている。すなわち、その家族の欠損性および完全性、教育水準、言語取得能力、所持資金等の属性等の理解を前提にしたうえで、とりわけ、(1) 家族での情報収集、資金、互助を可能とする能力、(2) 国外にいる親類・縁者へのサポートや情報交換能力、血縁ではない人々を家族の一員として組み込む習慣の有無——疑似家族(pseudo-families)の形成と「移民」連鎖(chainmigration)」の問題——、(3) 家族企業(family business)の形成の問題、そして(4) 他の「移民」集団との共同による「移民」コミュニティの形成(co-ethnic immigrant enclave)の問題等⁽³²⁾。

しかしながら、いったん「移民」家族の内部に目を移してみると、彼らは、異質な世界への適応の過程において、「崩壊と再-組織化(disorganization-reorganization)」のダイナミックな過程にあることがわかる。とりわけ「日系人調査」の過程で、我々は、家族の成員全員が同じ「適応」の過程にあるのではなく、それぞれの適応進度によって互いの「現実認識」に食い違いを生じること、それによって家族のなかのディスコミュニケーションを生じることなどが明らかにされた。こうしたディスコミュニケーションは何によって調整され家族としての一体感が再構成されるのか。それがここでの問いである。

さて、異質な世界での適応過程におけるそれぞれの「現実認識」を調整する要因として我々の日系人調査においては、家族としての「移民」の論理づけの形態が問題になる、との示唆が示された。異質な世界に参入する場合、彼らは家族として、どのような「論理」を形成し、どのように自らの組織的再構成をはかり、新しい状況に適応していくのか。この「家族としての移民論理の形成」がそれぞれの直面する「現実」を調整する。それは、とりわけ児童の適応とアイデンティティ形成には、強く影響する。米国の「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」研究においてはそれはどのように理論化されているか。

「家族の成員諸個人の、特にその意識的変容に焦点を合わせた移民プロセスの諸局面 (migrational process)」に関しては、C.スルスキー (Carlos.E.Sluzki) の考察が、示唆的である⁽³³⁾。スルスキーは特に、移民家族諸個人の心理的な動きに注目しつつ同プロセスを、(1) 準備段階 (preparatory stage), (2) 移民の実行 (act of migration) 段階, (3) 過剰補償の段階 (period of overcompensation), (4) 脱補償の段階 (period of decompensation), そして (5) 世代的調整の段階 (transgenerational phenomena) の各段階に整理している。

スルスキーによれば、(1) の段階は移民行為の実施への動機づけの段階で、この時期に移民を実施するために、家族の新しい役割や機能に関する様々な規則や目的などが論じられる。いわば移民行為の意味が煮詰められる段階である。

我々にとって興味深いのは、この過程においては、誰が、何のために移住するのかについての家族の“物語”がつくられる、という点をスルスキーが指摘している点である。

「移民家族」に面接調査をしてみると容易に気付くことであるが、彼らは移住の経緯に関する調査者の質問に、ひとつひとつ自分を確認しながら回答をしようとする。それは現時点における過去の経験の確認と意味づけの行為であり、必ずしも事実そのものではない場合もある。だがそれは明らかに現在の彼らの行為を論理だてる役割を演じている。さらに、児童がどのように異質な世界に適応し、そこでどのように自らのアイデンティティを確立していくか、との問題は彼らが家族のなかでどのように「外国暮らし」を説得され、それに積極的な意味を付与されそして自らがその“物語”のなかで、どのような役割を与えられているかに、強く影響される。筆者はそれを「納得の程度」という表現で呈示したが、彼らのそうした「納得」をささえ、彼らの直面する「状況」を「定義」するグリッドとしての役割を担うものが、家族のつくる「移民に関する物語」である。その物語に基づいて彼らが、異質な世界を生きていくとするなら、それは、ある意味で、家族による「状況の定義」の形成といってよい。ちなみに、スルスキーによれば、そうした“物語=状況の定義”において、移民行為を推進する「主役(hero)」や、それに反対する「反対者(oppressor)」そしてその移民行為

の「犠牲者(victims)」などの役割りがつくられるという⁽³⁴⁾。

無論そうした「物語＝状況の定義」は常に修正を繰り返される。実際スルスキーによれば、「移民」の過程は、移民行為が実施されるにともなう様々な儀礼や手段が動員される(2)の段階を経て、(3)の段階すなわち、異質な文化への適応と生存の過程での家族の機能再定義の段階に入る。スルスキーによれば、この段階において、自らの「エスニシティ」に特有な規範や価値や相互作用の様式などが、各個人の志向性のラインにしたがって再定義され、従来の家族の規則や生活スタイルなどが再考される。無論この過程には、移民地域における「先住者(regularities)」の役割が重要な位置をしめる。移民たちは、現実にはかれら「先住者」の「現実感覚」を身につける形で、新しい世界において、何が現実なのか、についての調整をおこなうことになる⁽³⁵⁾。前述の“物語＝状況の定義”の形成に則して言うならこの時期はそうした“物語＝状況の定義”の調整の時期ということになる。

さらに移民行為が軌道にのると彼らは新しい局面に積極的に対応していく。(4)の時期はいわば、新しい世界に彼らが積極的に乗り出していく時期にあたる。しかしこの時期は同時に、これまでの“物語＝状況の定義”の再構成がおこなわれるという意味で“危機の時期”でもある。スルスキーはこの時期を「新しいリアリティが再形成される時期」「新しいアイデンティティが再形成される時期」と名づけている。とりわけそうした危機は、「こどもたち」の文化適応をとおして家族にもちこまれ、これまでの家族のルールや価値が新しい文化に不適合であることにも気付かれる時期でもある⁽³⁶⁾。

スルスキーの上述のプロセス分析は、きわめて示唆的である。(3)の時期と(2)の時期は、現実の適応過程においてかれら移民たちが、自らの位置を確認し、その社会に適応できるか、それとも離脱していくかを決定する分岐点となる。「適応」に関わる“物語＝状況の定義”の全ては、この過程において再構成される。そしてその“物語＝状況の定義”が、彼らの適応類型、アイデンティティの再構成の形態などに影響を及ぼしていく。家族の“物語形成”は、その意味で彼ら全体の、一種の“状況の定義”として機能する。

ちなみに W.ジョーンズ(Wendy Jones)は、個人の心理的調整(adjustment)の過程に焦点をあわせつつ、都市に移住してきた家族の適応過程に関して、次のポイントに注目することが必要であると主張している。そのポイントとは、(1)移住をどのようなテーマのもとに理屈づけているか、(2)その際、過去の経験をどのようにそのテーマを理屈づけるためにもちだしてくるか、(3)このテーマのもとに現在の自らの行為を正当化するために、過去をどのように再構成するか、(4)時間の経緯とともにこの正当化はどのように変化するか、(5)自分の

過去及び現在の友人との比較において自らをどう位置づけているか、(6) どのようなネットワークのなかに自分を位置づけるかの諸点である⁽³⁷⁾。

上述の諸点は、上述の“形成された物語＝状況の定義”を分析するポイントとなるであろう。

異質な世界に参入してくる「移民」家族の役割は、その成員それぞれの位置を確認させ家族全体の方向性を決定し、彼らの直面する世界の再定義をその内に含む彼ら自身の“物語”の変化を見ていく必要がある。上述の、疑似家族形成の問題やファミリービジネス形態、そして家族としての紐帯の問題も、このなかで解釈される。

3. 児童——「社会化」過程と「エージェント」の社会的性格について——

伝統的に都市社会学の分野では、「移民」児童の研究は「青少年非行」との関連で行われてきた。現在でも無論そうした研究系列に属する研究は行われている。たとえば R. マツエダ (R. Matsueda) と K. ハイマー (K. Himer) は、黒人コミュニティと白人コミュニティとの非行率の相違に関する研究をおこない、「家族崩壊と非行との関係を説明する理論モデル」の必要性を提唱しているが、こうした研究はその代表的な例でもある⁽³⁸⁾。

だが、最近の「新移民」の適応との関連で注目されるのは、「移民児童のメンタルヘルス」に関する心理学的研究と、「学校教育や市民権の取得等とおしたホスト社会への社会統合のプロセス」に関する研究であるように思われる。

M. アロノビッツ (M. Aronowitz) によれば、前者の「移民児童のメンタルヘルス」に関する研究としては、従来、基本的には成人としての「移民」の「不適応 (maladjustment)」に関する研究が児童のそれに適用されてきたと述べ、そうした研究としては、『「移民」とアイデンティティ・コンフリクトとの関係に関する研究領域』『「移民」と非行との関係に関する研究領域』そして『「移民」と行動障害にかんする研究領域』があることを指摘している⁽³⁹⁾。とくに、「移民とアイデンティティ・コンフリクト」との関係に関しては「移民」児童の「適応過程」において最も焦点になる問題であるが、これに関してアロノビッツは、とりわけ彼ら児童たちが直接にホスト社会と接触する学校組織との関係に焦点を合わせつつ次の様に述べている。『彼らの家族やコミュニティが所有してきた行動規範や価値がこわれるので、ある一つの文化から別の文化へと移動してきた人々は行動の機能障害の可能性を増大させる。もし「移民」の児童たちが、かれら自身の文化に固執するなら、彼らはホスト社会からの孤立と疎外をひきおこす。他方、かれらが自分たちの文化的価値を放棄するなら彼らは自らの文化に拒否され疎外される』。そこでこの理論においては二つの要因が「移民」児童の適応の

問題に関して重要になる。一つは言語取得の持つ意味と学校の対応である」⁽⁴⁰⁾。

アロノビッツは、「移民」児童の適応とアイデンティティの問題に関わる諸要因として(1) 言語取得程度、(2) 教員の評価の仕方、(3) サークルや団体への参加度、(4) 仲間との親密な交流程度、(5) 家族の適応障害、(6) 「移民」の適応に関わる調停機関ないしプログラムの役割等を挙げ、それら諸要因との関係で分析する必要性を提唱している。

ところで、「移民」児童の適応に関する問題は、主に児童たちの直接の接触機関でもある学校での生活に焦点があわせられていることが、前記のアロノビッツの論議から推測されるが、この問題は、さらに、彼らの適応の問題が、学校というエージェントをとおした彼らの「社会化 (socialization)」の問題を提起していること、さらに、その社会化の問題は、受入れ社会の側からするなら、現行の秩序体制への組み込み＝社会統合のプロセスともなっているという事実にも我々は注目しなければならない。

だが特に「新移民」児童をめぐるこの観点からの研究はまだそれほど充実しているとは言いがたい。たとえばJ.W.ラメール (J.W.Lamare) は「移民」児童の政治的統合の問題について「アメリカ合衆国への継続的な「移民」の流入はこの国の特徴でもあるが、それはこの国の政治システムへの統合能力に対する緊張をもたらしている。だが不幸なことにこの種の問題を調査した研究はほとんどないに等しい」⁽⁴¹⁾と述べ、とりわけ、(1) 従来のように、「ニューカマーズ」としての「移民第一世代」とその第二世代の児童たちが自然に政治的な見識を身につけたり、広範囲にアメリカの価値にコミットしていくことを想定する考え方は単なる仮説にすぎないこと、(2) 子どもたちの政治的社会的化にかんするサンプル調査からでもエスニシティの違いがそのプロセスの重要な要因になっていること、したがって(3) 「移民」とその子孫の社会的化にかんする複雑な適応プロセスに関する研究が必要なこと、を指摘している。

ラメールはメキシコからの「移民」児童を対象に、かれらを (1) ニューカマーズ (児童とその両親および祖父母がメキシコ生まれの人々)、(2) 第一世代 (児童はアメリカ生まれであるが両親と祖父母はメキシコ生まれ)、(3) 混合世代 (児童はアメリカ生まれであるがその両親のどちらか一方がメキシコ生まれ)、(4) 第二世代 (児童とその両親はアメリカで生まれているがその祖父母がメキシコで生まれている)、(5) 第三世代 (児童その両親及び祖父母がアメリカでうまれている)等に分類し、「世代に関係なくメキシコ系アメリカ人児童たちは、アメリカの政治システムには制限付きのコミットメントしか示さない」こと、「ニューカマーズたちは心理的にはほとんど同化していないこと。そして世代を重ねるごとにアメリカにアイデンティファイしていくとする従来の直線的な同化理論については、第二世代の児童が、第

三世代の児童よりもアメリカに同化している結果から、疑問が提起される」こと、さらに「英語能力が児童の政治的社会的に、政治的社会的の認知と自らの伝統的文化へのユニークな理解とを深める」こと、そして「公立学校は社会化の過程におけるもっとも重要で影響力の強いエージェントであること」等を指摘している⁽⁴²⁾。

ところで、「移民」児童の「社会化」や「社会統合」プロセスにあって、「言語取得」と「学校在籍」が強い影響をもつことはこれまでの研究から指摘されているが、しかし、我々は一体どのようなプロセスに焦点をあわせてその問題に接近すればよいのか。この問題は筆者らの面接調査からもきわめて関心の深い、重要な研究テーマとして提起される。

「移民」児童の「社会化」と「社会統合」の問題に関する視点と枠組みについては、R.カーン (Reuven Kahane) の研究が興味深い事例を提供している⁽⁴³⁾。

カーンによれば、「移民」とは、一つの文化からもう一つの文化への全体的な移動を引き起こす問題性を帯びた過程であり、この過程は、個人ないし集団のアイデンティティにある種の危機感をもたらし、その「再調整 (re-adjustment)」を要求する。「移民」たち特に児童たちは、新しい社会のなかで、自らのアイデンティティや価値のどの部分を維持しどのようにその社会に統合されれば良いか、というジレンマに遭遇する。

ところでこの種のジレンマは特に、思春期の児童たちに、顕在化する。というのも彼らはその両親よりも、直接にしかも急速に、適応プロセスに遭遇するからである。実際彼らはしばしば、家族のために経済的な負担を負う必要に迫られるし、さらに、行政や「先住民移民」と家族との仲介的な役割を演じなければならない。こうした状況が彼ら思春期の児童たちに、一方ではその家族における責任と立場の強さを与え、他方では彼らに精神的重荷や緊張感を増大させる⁽⁴⁴⁾。

ところでカーンによれば、思春期の「移民児童」の社会化に関しては、とりわけ「各種の学校」が重要な役割をはたす。なぜなら「(学校や教員などの) 社会化のための機関及び人々は、古い価値と新しい価値とが出会い、その二つの文化を媒介する機能をはたし、またそれらを通してある選ばれた価値が青少年に伝達される、その意味でも媒介的な機関」⁽⁴⁵⁾であるからである。

そうした機関の研究にあって最も重要なポイントは何か。カーンは特に、インフォーマルなレベルでの関係性が最も重要なインパクトを与えることに注目する。そして具体的にはそうした「エージェント」としての役割を演じている各種の「学校」「友人グループ」などが、どのようなインフォーマルな人間関係を含んでいるか、という観点から研究されることになる。

特にカーンは、「統合のエージェンシー」としての「学校」と思春期の「移民」児童たちと

の関係をみる上での分析ポイントとして、(1)自発性 (voluntarism) の程度——「移民」児童たちが自らの関心にしたがって自由な選択をすることが許されるその程度——、(2) 多様性 (multiplexity) —— 異なった能力や関心をもつ参加者に対して様々な機会を提供でき、その活動に応じて異なった位置を与えることのできる能力——、(3) モラトリアム能力 (moratorium) —— 義務や意思決定を猶予する形式と程度。その制度の枠内でどの程度試行錯誤を許容できるかという能力——、(4) シンメトリー (symmetry) —— 参加者の間でのバランスのとれた互恵的な関係性が保持されているかどうか——、(5) 調節性 (modularity) —— 状況や関心の変化にしたがってその社会的な活動がどの程度変化しうるか——、(6) 現実的なシンボル操作 (pragmatic symbolism) —— それぞれの「移民」児童たちの行為が意味をもつための、周囲の認識程度——、(7) 表出的手段 (expressive instrumentalism) —— 「移民」児童たちが、自分自身の将来の目的の為の手段として考えられる活動がどの程度許容されるか、に関する問題——、(8) 構造的二元性 (structural dualism) —— 相互に矛盾する価値や志向性の存在をどの程度許すか、に関する問題。特に「移民」児童たちは様々な矛盾する規範を経験するのでこの問題は重要——等の諸点を挙げ、とりわけ、所与の教育機関においてインフォーマルな次元での以上のポイント群の達成程度に焦点を合わせることが極めて重要なことを指摘している⁽⁴⁶⁾。

カーンの調査研究の対象は、イスラエルでの「移民」児童におかれているためそこでは四種類の社会化の機関としての教育機関——それらはインフォーマルな機能の低い順に「学校」「全寮制の学校」「キブツの若者学校」「若者集団」の四つである——が考えられているが、わが国においては通常では、公立学校の他に「日本語学校」といった教育機関も考えられよう。社会化及び社会統合のエージェンシーとしての「学校」及び「日本語学校」の分析ポイントとしては、以上の研究を参考にすれば、特に、(1) 教員等の「ドミナント・フィギュア」の役割、(2) 基本的な規則 (basic code)、(3) 教員に認識されている目的と「移民」児童との認識との関係性、(4) インフォーマルな関係性が成立する (成立しない) 条件、(5) 「移民」児童の価値が認められる程度、(6) 教員の評価の仕方、等の問題が重要になろう⁽⁴⁷⁾。

4. アイデンティティと組織

—— 状況的アイデンティティと「社会的世界」概念 ——

「状況的エスニシティ概念」への注目以来、「移民」のアイデンティティ類型をめぐってはその“多面的かつ両義的”な性格がテーマとして取り上げられてきた。それは「移民」の適応＝

社会統合の過程において生まれてきた問題である。とりわけ筆者らの「面接調査」においては、彼らの、母国および受入れ国の双方を超えて、むしろ、彼ら自身の世界に立脚したアイデンティティの新しい形成が問題となっていた。

アイデンティティの“両義的性格”については、たとえば R. アルバレス (Robert Alvarez) は、「移民」特にメキシコ系「移民」のホスト社会への統合化の過程に関する分析を、「市民権獲得 (naturalization)」の過程に注目して行った研究のなかで、とりわけ彼らの「二重帰属 (dual allegiance)」意識を彼らのアイデンティティ形成の中心的な特徴として提起している⁽⁴⁸⁾。アルバレスによれば、「アメリカ市民としての自己イメージの確立については、彼らの、二つの国への帰属意識に注目することが重要になる。彼らはアメリカ市民としての自分の生き方を好ましいものと見て自分を自由に表現したり、国家への批判を行う権利を持つことを重要と考えている。だが同時に彼らは、自分の母国への帰属意識も維持している。適当な用語が見つからないので私は、それを、“二重帰属”と名づけた。だがこの二重帰属は、政治的忠誠や国家への忠誠というよりは、自分の生まれた場所の歴史や文化への忠誠的態度を意味している。母国に対する国家的アイデンティファイの恒常的な維持は、むしろ文化的なアイデンティティを維持するための社会的なメカニズムとなっている」⁽⁴⁹⁾。ちなみに、メキシコ系「移民」たちの「二重帰属的アイデンティティ」の形成に関しては、H. ペイコン (H. Pachon) がやはり、その市民権獲得過程に注目した研究のなかで、特に(1) 母国への近接性と紐帯の強さ、(2) アメリカの市民権をとると母国での権利を喪失するとの誤解、(3) アウトサイダーとしてのヒスパニック意識、(4) 市民権獲得の条件の不足、(5) ホスト社会の側の市民権獲得サービスのための行政的努力の不足、といった特殊事情、問題点を指摘している⁽⁵⁰⁾。

だがとりわけ、その「移民」として置かれた役割や社会的な位置に関する“本質的特徴”において、「移民」のアイデンティティ類型の特殊性を説明しようとする論者もいる。たとえば、E. ボナシック (Edna Bonacich) は、「移民」の社会的な役割を、“ミドルマン・マイノリティ (middleman minorities)”として呈示し、そうした役割をもつ条件を彼らの「一時的居留 (sojourning)」形態に求めている⁽⁵¹⁾。ここでいう“ミドルマン・マイノリティ”とは、社会の「媒介者」としての役割をもつ少数者集団のことであるが、ボナシックによれば、「一時的居留」は彼ら「移民」の社会的な役割とアイデンティティ類型において必ずしも十分な条件ではないが、必要条件をなすもので、それは社会的かつ経済的に特殊な影響を彼らに与える、という。すなわち、第一にそれは、彼らに、「経済的儉約」とある特定の職業への集中をもたらすこと（これは、長期的には故郷に帰る目的をはたすために、現在の不遇に耐える

ことからもたらされる)。第二にそれは、金銭的な貯蓄傾向を彼らに与えること(そして、この“未来志向 (future orientation)”は基本的に“定住者 (settler)”や“ネイティブ (native)”とは基本的に異なる彼ら独自の社会的な性格をもたらすこと)。そして第三にこの「一時的居留」の形態が彼らに長期に渡ってその社会に根を張るような職業とは異なる職業に志向させること、を指摘している⁽⁵²⁾。

ところでポナシックのこの概念の重要性は、それを、「移民」コミュニティの組織的性格に関する議論に結び付けている点にある。ポナシックによれば「一時的居留はその内的なソリダリティの強さを生むという非-経済的な結果をもたらす。一時的居留者たち (sojourners) は、帰国を計画しているので、周囲のホスト社会の成員たちと永続的な繋がりをもつことを欲していない。だが彼らはそれゆえに自らのエスニックな繋がり深く広範に維持しようとする……そこで彼らにおいては、そのエスニックな人間結合は必然的に強いものとなり、相互扶助は拡大する(だがこれは彼ら一時的居留者のコミュニティが完全に統合的であることを意味しない。むしろ逆に彼らは、その母国において見られる地域的、言語的、政治的、宗教的な違いに応じて分裂し紛争する。だがホスト社会との関係ではこうした違いはその自然な統合性の前に、消滅する)⁽⁵³⁾。実際、「移民」独特のアイデンティティ類型における「多面的性格」ないし「状況的性格」は、第一に「移民」として置かれた歴史的・社会的な位置や役割、そして自己と受入れ社会の側双方の「エスニック意識」に規定されるが、それはまた、彼らの形成するコミュニティのある種の特徴と密接な関連性をもつことが、上述の主張から推測される。

それならば、彼ら「移民」の「コミュニティ」組織としての特徴を我々は基本的にどのように押さえておく必要があるか。

とりわけ筆者らの「日系人面接調査」においては、その“コミュニティ”としての特徴は、(1) 未だ形成の途上にあり我々の目に見える厳然たるネットワーク形成や組織化については行われておらず、それゆえその成員性の点でも境界に関しても、「統合されたユニット」としての特徴は形成していないこと、(2) だがそれにも関わらず“日系人の世界”といったものは、各種のイベントや個人のエスニック意識の面では厳然として存在し、しかもそれは国家や地域の枠を超えて存在し、結果として彼らの性格や行動指針がそうした“世界”に影響されていること、さらに (3) その世界からは、コミュニティ的紐帯を支える“部内者組織”が事実として生みだされ、そうした組織が日系人世界を支える活動をしていること、などが示唆された⁽⁵⁴⁾。

上記のような「エスニックコミュニティ」独特の組織的性格については、たとえば W.ヤンシー (W. Yancey) らは、H.ガンスの所謂“アーバン・ビレイジャーズ”としてのエスニック・エンクレーブとの比較の上で、現代におけるエスニック・コミュニティの組織的特徴を、「コーホート」として提起している⁽⁵⁵⁾。すなわち彼らによれば、H.ガンスが描いたエスニック・エンクレーブとしてのエスニック・コミュニティは、同一のエスニシティからなる居住者の集中したネットワーク組織であり、地域における相互作用の密度の濃さと、いわゆる“スーパのさめない距離”での家族や親類縁者の紐帯の維持、地域諸制度への依存そして人間関係にもとづく就業機会の獲得等、によって特徴づけられるが(彼らはこれを「労働者コミュニティ」の特徴として提起しているが)、現在のエスニシティは明らかに上記のそれとは異なる特徴を示している、という。ヤンシーらによれば現在のエスニシティは「地域に特有な制度への依存とか、その地域に特有な相互作用を備えた包括的コミュニティを基礎にして形成されるものから、居住地としては広範囲に広がったコミュニケーションと、ある特定の社会的状況にだけ制限されるような行為を備えたものまで広範な実態をもつものまで広がってきた。後者の例としては、たとえば境界やシナゴークに出席する人々の集まりや、聖パトリック祭の行進に参加する人々の集合あるいはコロンブス・デイのパレードに出席する人々の集まりそして、同じエスニシティの候補者に対する投票者……などのなかに見出される。この状況的エスニシティは第二次大戦以後に形成された郊外居住地に代表されるような、いわば“疑似-コミュニティ(quasi-communities)”の居住者の、コスモポリタ的なネットワークのなかにもみつけることができる。それは明らかに、ゲットーや白人系のアーバン・ビレッジにみられたエスニシティとはことなるものである」⁽⁵⁶⁾。ちなみにヤンシーらと同様の見解は、J.レックス (J. Rex) らにおいてもみられる⁽⁵⁷⁾。

ところで「コーホートとしてのコミュニティ概念」あるいは「疑似-コミュニティ概念」が、(1) エンクレーブ化したりジッドな組織ではなく、(2) それゆえ成員性と境界において曖昧で、(3) エスニシティを軸にしてルーズにまとまる、アモルフアスな人間的集合で、しかも、(4) そのなかから新しい組織や集団が生まれては消える、そうした社会的集合体としてのコミュニティを類比的に捉えようとしているのに対し、そうした性格の集合体を積極的に分析するための概念も、社会学の別の領域において呈示されだしてきた。そのひとつの例としては、A.ストラウス (A. Strauss) らのいわゆる「社会的世界 (social world) 概念」がある⁽⁵⁸⁾。

「調査対象者たちが経験している、まさにその世界」としてシカゴ学派によって提起され

た同概念⁽⁵⁹⁾をさらに分析対象として発展させたストラウスによれば、社会的世界とは「コミュニケーション・ネットワークでむすばれた、一連の、共通の活動や関心の総体」として定義される⁽⁶⁰⁾。ストラウスによれば「社会的世界とは主にはそれは挿話宇宙を指すのだが、ただそれは単なるコミュニケーション類型やシンボル化の形態……其自体ではなく活動やメンバーシップや場所や技術や組織のタイプをそのうちに含む（集合体である）……それには、大きい世界も小さな世界もある。またインタナショナルなものもあれば、ある地域に限定されるものもある。また地理的に識別されるものもあれば、場所はあっても地域的に限定されないものもある。そして高度に公共的である世界もあれば、目に見えない場合もある。また余りにも急に出現してなかなか把握できないものもあれば、既に確立され組織化されているものもある……だがわれわれはこうした世界の活動やコミュニケーションが知的、職業的、宗教的、性、などそれぞれのテーマに沿って異なって形成されていることに注目しなければならない。すなわち社会的世界とはそうした特徴的実体なのである」⁽⁶¹⁾。要するにストラウスは、今まさに生成過程にある社会的集合体を、しかも本稿での用語をつかうならきわめて状況的にその境界やメンバーシップが形成されるそうした人間集合を単なる類比概念以上の「社会的実体」として、その分析を試みているのである。

ストラウスは直接には本稿で対象とする「移民」コミュニティに関する記述をおこなっていないが、より近い論議は、D.アンルフ (D.R.Unruh) によって行われている⁽⁶²⁾。

アンルフによれば「初期シカゴ学派が示唆し、シブタニやアーウィンやストラウスらが発展させた社会的世界概念とは、本質的に、拡散し無定型な社会組織のことを指す。集団ないし組織よりは一般に大きなこの社会的世界は、必ずしも公的な境界やはっきりした成員リストや地理的な領域などによっては定義されない。本稿の目的からいえば社会的世界とはそれに参与する人々によって認知された関心や関与と結びつく様々な実戦や出来事そして行為者其自身や組織によって認知された布置連環といえるものである。本質的に社会的世界には中枢的な権力構造は不足しており、シブタニが言うようにそれはコミュニケーションの有効性と非領域性そして公的な成員性をもたない社会的集合という特徴によって定義される」⁽⁶³⁾ものである。

さらにアンルフは社会的世界における四つの主体類型を想定し、その分析を行おうとしている。その主体類型とは、「異邦人 (stranger)」「移動者 (tourist)」「定住者 (regular)」「内部者 (insider)」である。この四つの主体類型は、それぞれの「社会的世界に関する知識への接近性によって」カテゴライズされる⁽⁶⁴⁾。無論その時その社会的世界も関連性構造の成層化

された世界として認識される⁽⁶⁵⁾。

すなわち「社会的世界はそれ自身の世界をめぐって層化された関連性の構造を常につくりだしている。これらの関連性構造はその世界をめぐる最も本質的な知識から、その世界をある程度は知っている人用の知識、そしてたまたまその世界に接近する人が知りえる知識まで同心円状をなしている」⁽⁶⁶⁾。

ところで以上の社会的世界概念が、「移民」コミュニティにそのまま適用できるかどうかに関しては無論、いくつかの留保が必要である。とりわけ本稿での観点からするなら「移民」コミュニティにおける「主体類型」は、社会的世界自体への「接近性」にもまして、彼らの「移民経路」、「エスニック意識」あるいは「帰属意識」などに基づく「アイデンティティタイプ」を基準に考察したほうが現実的であると思われるし、また、その「組織的性格」も「適応-統合」の歴史的、現実的過程との関連で扱われる必要がある。

だが、我々の扱ういくつかの「移民」コミュニティが、その境界性の点でも成員性の点でもきわめて状況的な性格が濃いものであるとの事実を前提にするなら、そして「移民」コミュニティへの関わりかたが、彼らの行動を規定する一つの要因として挙げられるとの事実を想定するなら、さらにエスニックコミュニティ研究の一つの重要な目的が、異質な彼らの形成するその「世界」の認識にあるとするなら、われわれは、上述の側面からの「移民」コミュニティの理解に注意を払う必要がある。

IV. 結びにかえて

—— 都市社会学と「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」

さて我々はここまで「適応-統合」過程に焦点をあわせて「移民」行動研究の“指針”について見てきた。

とりわけ「適応形態」に関しては、民族的な特殊事情や受入れ側社会の制度的事情だけではなく、相互の「異質性認識」に注目しつつ、その「非ゼロサムモデル」の適応形態に注目する視点を確認し、家族の役割に関しては特に彼らが作る「移民物語＝状況の定義」とそれにもとづく成員相互の調整の形態に注目する視点を確認した。さらに「児童」の適応の問題については、それを「社会化の過程」ととらえ、「社会化のエージェント」としての学校等の性格と役割に関する分析ポイントを確認してきた。彼ら「移民」たちのつくる「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」の性格についても、地域や国家を超えるその「社会的世

界」としての特徴を、「境界性」「成員性」「凝集性」等の諸ポイントにおいて分析する視点を確認した。我々はこのそれぞれの側面から現在の「移民」行動について、あくまでも「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」として分析する立場を主張してきた。実際、異質な世界への「適応-統合」の過程はきわめて複合的かつ立体的な過程である。我々は、現在の彼らの「移民経験 (immigrant experience)」を見ていく時でも、分析的には、その「文化的適応」と「社会的適応」の両側面をわけて考えていかなければならないし、また、彼らの「非ゼロサムモデル」(K.キムらの表現)の現実的、具体的な位相の検討も彼らの「帰属意識」の問題を絡めて実施する必要がある。さらに、この「帰属意識」の問題は、受入れ社会と彼らのあいだに形成される相互の「エスニック意識」や「制度的拘束」との関数でもある。さらに、彼らの「エスニック意識」や「帰属意識」は、彼ら個人がその成員である家族の、いわば「形成された物語=状況の定義の構成」によって与えられる役割や位置に依存する度合いも大きいし、またそれには、実際の「受入れ社会」の側の直接の接触者であるところの各種の「エージェント」——たとえば児童に関しては学校と教員などがそれにあたる——の及ぼす影響も見逃すことができない。ちなみに T.M.オールドマイケル (T.M.Woldmikael) は児童の社会化の過程における「適応類型」を、「自己主張タイプ (assertion)」と「同調タイプ (accommodation)」の二つの軸において分析しているが⁽⁶⁷⁾、現実には、より精密な彼らの行動様式とそれに関わる諸条件の分析は我々の緊急の課題でもある⁽⁶⁸⁾。

ところで最後に我々は、「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」論の題域において分析することの意味についても触れておかなければならない。それはまず彼らのつくる「世界」そのものを認識する必要に基づいているということである。もともと都市社会学分野での「コミュニティ論」自体、異質な民族同士が混在し、それが作り上げる世界を分析するというテーマを背負っていた。例えばシカゴソシオロジーにおける方法としての参与観察などは周知のように、異質な世界（「移民」コミュニティ）の内側から彼らの思考と行動のパターンを探りだすための方法であったし、前述の社会的世界概念なども「調査される人々の経験するまさにその世界」を捉えようとする時の「概念用具」として使われたものであった。冒頭で述べたように彼らの独自の経験がつくりだすその「世界」を捉えるには、「コミュニティ」という世界において、彼らの経験する多様な相のすべてについて、彼ら自身の論理に従った分析が必要になるのである。

この問題はさらに重要な問題を我々に提起する。すなわち、厳密に言えば、このとき双方の接触によって形成されるその「世界」とは、「移民」に独自の世界でもないし、ましてやそ

れは「受入れ社会」の側の「世界」でもない。それは双方の人々によって接触、共有された新しい「世界」でありここまで述べてきた「適応」と「統合」の問題群もその上で発生する。そうした「世界」においては、彼ら「移民」も「対処する人々」も同時に「異質」な要素として対峙せざるを得ない。ちなみにシカゴソシオロジーの「コミュニティ概念」は、そうした異質な「移民」同士の「私的な論理」のぶつかり合いから共有の「公的な論理」が形成されてくるプロセスを表現する。如何に「共有の論理」を形成するかとのテーマはまさに都市コミュニティ論の主テーマでもあった。筆者は再三「移民」の適応の問題が視点を変えればそれは「社会統合」の問題＝秩序への組み込みの問題であることを確認してきたが、それは都市コミュニティ論のテーマと「同型的」である。その意味でも筆者は、現在の外国人問題を「コミュニティ論＝エスニックコミュニティ論」の研究題域に置いて考察することの意義を感じている。無論わが国の場合、厳密には、異質なものの双方のつくる共有の論理を求めるといふ歴史は持っていない。むしろ既成の「公的論理」のなかに如何に異質な「私的論理」がその場所を獲得していくかとの歴史であった。その意味で「移民」ないし外国人の問題は「都市コミュニティ論」の主テーマをさらに明瞭にする研究領域を付け加えたと感じている。

ところで以上のように、彼ら「異質」の人々の適応過程が提起する問題は、同時に都市を舞台にして展開するわが国社会の構造的な特徴のいくつかをより明瞭にするという事実も最後に確認しておきたい。たとえば、特に児童の社会化の過程に関する検討のなかですでに述べてきたが、「移民」児童に対する教員や学校システムの対応の仕方や制度的性格そして児童たちの様々なサンクションなどは通常の状態でのその性格分析においてはあまり明瞭化されない。むしろそれは、異質な要素との接触の過程で露顕するとの側面がみられる。

以上、本稿での「エスニックコミュニティ」研究の基本的な立場をひとことと言えばそれは、彼らのアイデンティティの行方を彼ら自身がつくる「世界＝コミュニティ」との関連で考察するということであり、その過程で、社会的秩序の生成、維持、再編に絡む問題が透けて見えるということになる。その具体的な指針が上述の分析視点として示してきたものであった。ちなみにこうした「社会的秩序」のテーマは、“見えない領域への通路”として機能する「地区センター」に集まる外国人への接近を調査の出発点としていた、という事情もあった⁽⁶⁹⁾。都市はそうした「地区センター」なども含む様々な「社会的結節点」の集合する空間であるとするなら、まさにこのテーマは、都市社会研究の一つの手段としても位置づけられる。

「エスニック・コミュニティ（移民コミュニティ）」の「適応-統合」過程の研究を上記の題域においてさらに継続して実施していかなければならない。

<註と引用文献>

- (1) 広田康生・藤原法子「ある調査の記録:フィールド日誌に見る鶴見の日系人世界==都市エスニックコミュニティの形成と自己確証の行方」『専修大学社会科学研究所月報』1993年.4月号
- (2) R.E.L.フェアリス『シカゴ・ソシオロジー 1920-1932』奥田道大・広田康生訳. ハーベスト社. 1991年.参照。
- (3) 広田・藤原「前掲論文」.特に結論部分を参照。
- (4) Nielsen, F. Toward A Theory of Ethnic Solidarity in Modern Societies. A.S.R. vol.50. 1985. pp.133-134.
- (5) F.ニールセンによれば前者のモデルあるいは解釈枠組みでは,エスニシティの再生は,文化的に区別された中枢による周辺の取奪への対抗を原因としている。特にそうした対抗に基づく連帯は,文化的な分業すなわち,諸個人が特定のタイプの職業や外見からすぐそれとわかる特徴を基礎とした社会的な役割に基づく連帯によって発生する,とされる。こうした文化的な分業を軸に,「エスニシティ」は構造的に決定され,その構造的な差異が大きければ大きいほど,その連帯性は強くなる,と説明される。
それに比べ「競争的エスニシティモデル」では,文化的に異質な人々及び社会が産業化されればされるほど,様々な普遍主義的諸基準が,従来の帰属的な地位にもとづく伝統的な社会システムを突き崩していくが,様々な集団のメンバーが,同じ職業や同じ報酬を求めて競争状態が激化すると,人々は自らのエスニシティや他の帰属的な特徴をそうした激化した競争に打ち勝つ資源として動員するようになると説明される (Nielsen, F. ibd.)。
- (6) Olzak, S., Contemporary Ethnic Mobilization. Anual Review of Sociology. 1983.
- (7) オルザックの挙げたモデルは以下のように説明される。すなわち (1) 発展理論 (Developmental Theories) —— この立場においては,国家形成は一元的な発展段階を辿ると仮定され,エスニシティに基づく集合や運動の発生は,政治的發展を阻害するものであり,国家を形成している中枢的な文化への同化との矛盾において発生するとされる。(2) 内的植民地及び文化的分業モデル —— このモデルは世界規模で見られる「中心-周辺理論」の一国規模でのエスニシティ現象への適用によって説明しようとするものだが,しかし地域の不均等な発展とエスニック運動を直接結び付けるのではなく,労働市場が文化的境界やエスニシティ的境界によって分離される時という条件をつけて説明しようとするもの。(3) 経済学的モデル:引き裂かれた労働市場モデル (Economic Model of Ethnicity: Split and Segregated Labor Markets) —— この立場ではエスニック組織やエスニック・ソリダリティを,ある種の経済的な条件や適応の産物とみる。(4) 競争的モデル (Competitive Model of Ethnic Mobilization) —— この立場ではそれぞれのエスニック・グループは同じ労働市場での競争に直面し同じ政治的,経済的,社会的資源への接近を強制されるため,必然的にエスニックな要因を軸にした集合が発生すると解釈する (Olzak, S., ibd. pp.358-364)
- (8) オルザックのいう「エスニック・モービライゼーション」とは「集団的な目標の追求のためにエスニック・アイデンティティ (たとえば肌の色や言語や習慣など) を軸にして集団が形成される過程

を指す」(Olzak, S., ibd. p.355)。

またオルザックによればエスニック・ソリダリティとは「所与のエスニックたちがもつアイデンティティに関する意識のことを言い、強い民族的なネットワークを維持し、新しいメンバーを社会化し、さらにその社会的な絆を強めるものを指す」(Olzak, S., ibd. p.356)。そしてそうした「エスニック・ソリダリティ」は「エスニシティ内婚姻率やエスニック組織におけるネットワークへの参加度や相互作用の密度、そしてホスト社会のそれとは異なる、様々な文化的な活動の保持などによって測定される」という(Olzak, S., ibd. p.357)。

- (9) この問題については本稿で取り上げた各論者が一様に述べているところである。ちなみに Simon, R., *Refugee Families Adjustment and Aspirations: A Comparison of Soviet Jewish and Vietnamese Immigrants*. *Ethnic and Racial Studies*. vol.6. 1983. pp.494-495. 参照。
- (10) Simon, R., ibd. p.494.m
- (11) Massey, D and Denton, A., *Trends in The Residential Segregation of Blacks, Hispanics and Asians: 1970-1980*. *A.S.R.* vol.52. 1987.
- (12) たとえばマッセイとデントンによれば、その構造的な変化として、1964年の市民権法が、黒人と白人との共学や様々な差別的な諸法の改正や雇用における差別撤廃などを含む公的な場面での人種差別に打撃をあたえたこと。そして、1965年の選挙権法によって黒人の選挙制度への参加の道がきりひらかれたこと。そして最後に、1968年の市民権法の改正によって住居の取得や購買における人種差別が撤廃されたことなどが、挙げられるという(Massey, D and Denton, A., ibd. p.802)。さらに、これらの諸法の改正は白人のあいだの社会的な態度の変容をもたらし、「1960年代と1970年代をとおして……居住地を共にすることに異をとる白人のパーセンテージは確実に減少し……1970年代をとおして公的生活場面、スポーツやメディアの仕事では白人と黒人との混合は確実に増加しているとの各種の報告」がみられた、という(Massey, D and Denton, A., ibd. p.802)
- (13) Massey, D and Denton, A., ibd. p.803.
- (14) Massey, D and Denton, A., ibd. p.803. ただここで断っておかなければならないのはマッセイとデントンの主張は、こうした構造的な変化によっても「白人-黒人関係」は変わらない、と主張することにある。この点に関しては、注の(2)を参照して戴きたい。
- (15) Gold, S., *Perspectives on Refugee Adaptation*. in Gold, S., *REFUGEE COMMUNITIES*. p.5-8.
- (16) Kobrin, F.E., *Out-Migration and Ethnic Communities*. *International Migration Review*. vol.17. 1983.
- (17) Model, S., *A Comparative Perspective on the Ethnic Enclave: Blacks, Italians and Jews in New York City*. *I.M.R.* vol.19. 1985.
- (18) Kobrin, F.E., ibd. p.427.
- (19) Gold, S., ibd. pp.1-25.
- (20) Gold, S., ibd. p.7.

(21) 「エスニック・コミュニティ」の問題には必然的に「異質性認識」の問題が伏在する。特にアメリカにおけるその問題は、「白人-黒人関係」を中心にした「人種・エスニシティ関係 (Racial Relations)」論において先鋭な形で展開する。それは単に「社会経済的な構造上の位置関係」には還元できない問題をその内に含む。

たとえば前述のマッセイとデントンは、アメリカ大都市圏における社会的、政治・法律的構造の変化にもかかわらず「白人-黒人関係」を軸にした「レイシャル・リレーションズ」に関する限り、基本的な変化はないと主張する。マッセイとデントンによれば「第一に、1970年代をとおしてその人種の民族的地位には目立った変化が認められない。1970年のセンサスを用いたヒスパニックと黒人のそれぞれのセグリゲーション・パターンの違いに関しては、どちらも殆ど変化はない。さらに1970年と1980年のセンサスからは、大都市地域における黒人のセグリゲーション・プロセスには有意な差は認められず、彼らのセグリゲーションの程度は、社会経済的な地位の変化とはそれほど強い関係は認められず、またそれは黒人の郊外居住現象ともそれほど関連してはいない」し、さらに、公平な住宅立法の制定や白人の人種の態度の変化や黒人中産階級の成長などの社会経済的諸条件の変化も、白人黒人関係を殆どかえることはなかったという。彼らはエスニシティ研究について次のように結論する。「我々がこれまで述べてきたセグリゲーション・パターンに関する議論は、アメリカ社会における人種の意味についてある重要な論議を提供している。すなわち、黒人のセグリゲーションの程度の高さそしてその社会経済的な地位に関係しない特徴は、アメリカ社会における基礎的な集団セグリゲーションの条件として、依然として問題になる、ということである。だがそれは決して言葉の純粋ないみでの人種ではない……問題なのは人種ではなく、黒人なのである」(Massey, D. *ibid.* p. 823)。

(22) Kim, K.C and Hurh, W.M., *Adhesive Sociocultural Adaptation of Korean Immigrants in the U.S.: An Alternative Strategy of Minority Adaptation*. I.M.R. vol.18. 1984.

(23) Kim, K.C and Hurh, W.M., *ibid.* pp.191-192.

(24) Kim, K.C., *ibid.* pp.192-193. キムらは、具体的には、(1) 文化的同化 (cultural assimilation — 英語の熟練度、アメリカのマスメディアへの接触度、ファーストネームの改名度により調査 —, (2) 社会的同化 (social assimilation — 白人の友人の所有度、アメリカのボランティア・アソシエーションへの加入度により調査 —, そして (3) エスニック・アタッチメント — コリアン系マスメディアへの接触度、コリアン系住民との親密な交際、コリアン系ボランティア・アソシエーションへの参加度、コリアンカルチャーへの感情的一体感 — などによって彼らのそうした適応の類型を抽出している

(25) Kim, K.C and Hurh, W.M., *ibid.* p.190. なおここでの「執着的適応」についてキムは次のように定義している。「執着的適応とは、移民の伝統的な文化や社会的ネットワークの重要な部分についての修正や置き換えをすることなく、ホスト社会との新しい社会関係や文化がその内に加わるような、ある特定の適応の形態を指す。適応とは、移民達が新しい環境と比べて自らの生活諸条件を維持し、改善していくために、その態度や行動パターンを修正していく過程である。このような意味では適応とは文化変容 (acculturation), 同化 (assimilation), 凝離 (segregation), 多

元主義 (pluralism), 執着 (adhesion) など適応の様々な型やその結果などを含む広い概念である」
(Kim, K.C and Hurh, W.M. ibd. p.188)。

また前述の「執着的適応」と「多元主義 (プルーラリズム)」との関係についてキムはつぎのように述べている。「執着的適応をエスニック・プルーラリズムの一つの形態とみなすことも可能である。ただし他のモデルと同様プルーラリズムは多様に定義されうる。たとえば文化的プルーラリズム、構造的プルーラリズムなど……文化的プルーラリズムとはある社会において違ったエスニック・サブカクチュアがいくつか存在する状態をあらわしそれが人々の志向や感情や行為の様々な様式をつくりだすような状態を指す。構造的プルーラリズムとは、ある社会における社会的な相互作用の場面でエスニック・アイデンティティが相互にはっきり認識され、その社会的相互作用にそれがなんらかの制限を与えたり、あるいはそのエスニック・アイデンティティを相互に交流させたり、またそれを利用したりできる状態を表している。もしこうしたプルーラリズムを多重文化 (bi-cultural) ないし多重社会 (bi-social) における適応の理想的形態とするなら、執着的適応はこうしたプルーラリズムの一つの形態トシテ定義することができる」(Kim, K.C and Hurh, W.M., ibd. p.191.)。

- (26) Kim, K.C and Hurh, W.M., ibd. p.189.
- (27) Poltes, A., The Rise of Ethnicity: Determinants of Ethnic Perceptions Among Cuban Exiles in Miami. A.S.R. vol.49. 1984.
- (28) Poltes, A., ibd. p.385.
- (29) Lyman, S.M., Interactionism and the Study of Race Relations at the Macro-Sociological Level.. Symbolic Interaction. vol.7. 1984.
- (30) Lyman, S.M., ibd. p.111.
- (31) Lyman, S.M., ibd. p.112.
- (32) Gold, S., Differential Adjustment Among New Immigrant Family Members. Journal of Contemporary Ethnography. vol.17. 1989.
- (33) Sluzki, M.D., Migration and Family Conflict. Family Process. vol.18. 1979.
- (34) Sluzki, M.D., ibd. pp.379-382.
- (35) Sluzki, M.D., ibd. pp.382-384.
- (36) Sluzki, M.D., ibd. pp.384-387.
- (37) Jones, W., Newcomers Biographical Explanations: The Self as An Adjustment Process.. Symbolic Interaction. 1980.
- (38) Matsueda, R.L and Heimer, K., Race, Family, Structure and Delinquency: A Test of Differential Association and Social Control Theories. A.S.R. vol.52. 1987.
- (39) Aronowitz, M., The Social and Emotional Adjustment of Immigrant Children: A Review of the Literature. I.M.R. vol.18. 1984
- (40) Aronowitz, M., ibd. pp.246-247.
- (41) Lamare, J.W., The Political Integration of Mexican American Children: A General

- Analysis. I.M.R. vol.16. 1982. p.170.
- (42) Lamare, J.W. ibd. pp.171-184.
- (43) Kahane, R., Informal Agencies of Socialization and the Interaction of Immigrant Youth into Society: An Example from Israel. I.M.R. vol.20. 1986.
- (44) Kahane, R., ibd. p.23.
- (45) Kahane, R., ibd. p.23.
- (46) Kahane, R., ibd. pp.24-25.
- (47) 「移民」児童の行動と社会化のエージェントの性格については注(1)の「調査の記録」を参照。また本稿の執筆段階では詳しく説明できなかったが、特に「児童の社会化」の研究については、注(66)のオールドマイケルの所論が参考になる。
- (48) Alvarez, R.R., A Profile of the Citizenship Process Among Hispanics in the United States. I.M.R. vol.21. 1987.
- (49) Alvarez, R.R. ibd. p.330.
- (50) Pachon, H., Naturalization: Determinants and Process in the Hispanic Community. I.M.R. vol.21. 1987.
- (51) Bonacich, E., A Theory of Middleman Minorities. A.S.R. vol.38. 1973.
- (52) Bonacich, E. ibd. pp.584-586.
- (53) Bonacich, E. ibd. pp.585-586.
- (54) 広田・藤原「前掲論文」.
- (55) Yancey, W.L., E.P.Eriksen and N.R.Juliani., Emergent Ethnicity: A Review and Reformulation. A.S.R. vol.41. 1976.
- (56) Yancey, W.L., E.P.Eriksen and N.R. Juliani. ibd. p.399.
- (57) Rex, J., RACE AND ETHNICITY. Open Unive. 1986.
- (58) Strauss, A., A Social World Perspective. Studies in Symbolic Interaction. vol.1. 1978.
- (59) Short, J.F. (jr) ., The Social Fabric of the Metropolis. The Univ. of Chicago Press. 1971. p. xxxv.
- (60) Strauss, A., Social World and Lgitimation processes. S,S.I. vol.4. 1984.
- (61) Strauss, A., A Social Wprld Perspective. pp.121-122.
- (62) Unruh, D.R., Characteristics and Types of Participation in Social Worlds. Symbolic Interaction. vol.2. 1979.
- (63) Unruh, D.R., ibd. p.115.
- (64) Unruh, D.R., ibd. p.115.
- (65) Unruh, D.R., ibd. p.123.
- (66) Unruh, D.R., ibd. p.123.
- (67) Woldemikael, T.M., Assertion versus Accommodation: A Comparative Approach to Intergroup Relations. American Behavioral Scientist. vol.30. 1987.

- (68) 「移民」児童の社会化に関する研究は緊急の必要性に迫られている。現在筆者らは注(1)でその面接調査の記録の対象とした「横浜市日本語教室」の外国人児童を対象に「日本語教室通学児童・生徒の生活意識に関するアンケート調査」を実施しているが、その集計結果については近日中に整理する予定である。
- (69) 広田康生「コミュニティ施設と地域的生活課題の諸相について」『専修人文論集』第50号、1992年9月。

<編集後記>

2号連続で広田所員の論考をお届けする。前号では、鶴見の日系人世界の調査結果が呈示されたが、本号では具体的事例の理論化に関する研究文献の克明なレビューが与えられている。大作をお寄せ頂いた広田所員の労を多としたい。

当然のことながらフィールド・ワークなき理論モデルも、理論モデルなきフィールド・ワークも、共に十全な説得力をもちえない。異なったコミュニティーにおける民族の「統合」と「適応」の問題が本稿の主題であるが、上に述べた意味での「統合」と「適応」の問題もまた、我々の研究方法に対してつきつけられていることは論をまたないであろう。(K.K.)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 麻島昭一

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
